

# 白洲正子 町田・武相荘での暮らし



戦後間もない頃の武相荘



武相荘の庭でくつろぐ次郎と正子 (1950年代)

随筆家・白洲正子は、太平洋戦争開戦の翌年（一九四二年）、爆撃が始まった東京の戦禍を逃れるため、夫・次郎とともに南多摩郡鶴川村能ヶ谷（現・町田市能ヶ谷）の農家を購入し、一九四三年に転居しました。二人にとつての初めての持ち家となった茅葺屋根の家は「武相荘」と名付けられ、生涯をここで過ごしました。

執筆のために西国への取材旅行を繰り返した正子にとって、武相荘は疲れを癒してくれる安らぎの場であり、次なる仕事への活力を生み出す場でもありました。

今回は、エッセイやインタビュー記事から、正子の暮らしをひもときます。

戦時中、食料の買い出しにしばしば訪れていた鶴川村。東京からこの地へ転居を決めた理由を娘に尋ねられたとき、正子は次のように答えたといひます。

能ヶ谷という地名に強く惹かれたというのです。幼少の頃より親しみ愛した能という字の入った地名に、自分の運命を感じたそうです。

『随筆家・白洲正子—あざやかなる生の軌跡』展  
図録（二〇一〇年 町田市民文学館より）

永田町で生まれ都会的な生活を送っていた正子でしたが、四季の移ろいが感じられる自然豊かな鶴川村での田舎暮らしをとてにも気に入っていました。

都会の生活が嫌で、家と一緒呼吸しながら四季の移り変わりを自分の肌で感じる、そういう暮らしが良かった。これは都会と違って、朝、窓を開けた途端に木犀や木蓮の匂いが漂ってきて、「ああ、秋だなとか、「春だな」とか感じるよ」が、きんんです。

『白洲正子「ほんもの」の生活』  
（二〇〇一年 新潮社より）



白洲 正子 (しらす・まさこ) 1910-1998

随筆家。東京生まれ。鶴川に転居した1943年に初めての著書『お能』を刊行。青山二郎や小林秀雄との交流を通して骨董の世界に没入するとともに文章指南を受ける。1964年『能面』で第15回読売文学賞を、1972年『かくれ里』により第24回読売文学賞を受賞。独自の感性と視点によって、日本古来の美の世界を捉えなおし、数多くの作品を残した。

正子は日々の暮らしに花を絶やしませんでした。花を活けていると不思議に元気が湧いてくると言い、活け方には彼女ならではの流儀がありました。

私の生け花は、だれかに習ったわけじゃなくて、実は器が先生なの。器がこういうふうに分けて下さいって語りかけてくる。人間に自分に合った家が必要のように、花にも落着く場所が必要。

花はいつも儂いものだから、その可憐な花をしっかりとした器が受けとめる。そこに静と動の調和した世界が生まれるの。極端にいえば器あっての花なのよ。

『白洲正子「ほんもの」の生活』  
（二〇〇一年 新潮社より）



「美の目利き」「美の求道者」と呼ばれ多くの骨董を収集した正子。彼女にとつて骨董は、美術品として「愛」のものではなく、日々の生活で「使う」ものでした。

はじめの頃は私も、きれいな唐の人形や、宋の赤絵などに心をひかれましたが、ただ鑑賞するだけではだんだん満足ゆかなくなると、じかに唇にふれる盃とか茶碗、日常使える徳利や皿のたぐいが好きになり、そんな物ばかり集ってしまいました。眼に映る形のほかに、触感も加わって、そのたのしみは増すばかりです。

『暮らしの中の美』 『白洲正子全集』  
第二巻 二〇〇一年 新潮社より



緑釉木の葉文皿 北大路魯山人作 (武相荘蔵)



緑釉土瓶と色絵有平縞湯呑 北大路魯山人作 (武相荘蔵)

写真提供：旧白洲邸武相荘

今回の展覧会では、正子のライフスタイルに注目し、彼女の審美眼に適った品々を、暮らし・おしゃれ・たしなみ・ライフワークといったテーマに分けてご紹介します。また、夫・次郎の足跡を振り返るとともに正子からみた次郎の素顔にも迫ります。文化は「一人一人のその日その日の生活の中にある」と述べ、好きなことを貫き、楽しい時間を探し求めた正子の暮らしぶりを、ぜひご覧ください。

## 「白洲正子のライフスタイル—暮らしの遊び」展

展覧会会期 2019年10月19日(土)～12月22日(日)

観覧料 一般400円 大学生・65歳以上200円 高校生以下無料

休館日 月曜日、第2木曜日

観覧時間 10:00～17:00

町田市民文学館ことばらんど

〒194-0013 町田市原町田4-16-17

TEL: 042-739-3420 / FAX: 042-739-3421

リサイクル適性 (A) この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

この広報紙は、109,700部作成し、1部あたりの単価は4円です。(職員人件費を含みます。)